



▲鉄道の高架も瓦礫で埋め尽くされていた。

写真提供 南三陸町社会福祉協議会

「震災直後は町民1万人と連絡が取れない」と報道され、住民は家族や知人の安否がどうなっているか不安でいっぱいだった。必要な情報が全く得られず、入ってくるのは誰かの携帯ラジオから流れる県内外の被災情報だけだった。

電話、携帯電話、インターネットなどの通信インフラは、アンテナやケーブルの破壊により全く使えない状態に陥った。

災害対策本部に届く情報は、通常なら車で数分のはずのところから瓦礫を乗り越えて歩いてきた人が伝えに来る数時間前の情報だった。

児童の送迎バスが無事だったとか、住民がいたところで食料もなく孤立しているが、力を合わせて何とか凌いでいるという情報が災害対策本部に届くと、職員たちはほっと胸をなでおろした。

思うように被災状況の情報が収集できないだけでなく、物資を調達することも、指示を伝えることも、窮状を訴えることもできなかった。生き残った命を守るためのあらゆる手段が失われていた。